2023.6.10
シンポジウム報告

新規就農者と地域サポートを考えるシンポジウム

地域と農業の再生へ！

開会挨拶をする
実行委員長
菅野 大地 さん

6月10日新規就農者と地域サポートを考えるシンポジウムが開催され約100名が参加しました。就農者同士の交流や学びあい、就農をサポートする地域や行政、団体を含め、さらなる担い手の定着を目指します。

主催団体 福島県農民連 後援 福島県・二本松市・福島大学食農学類・二本松市循環型農業推進協議会

島根県邑南町からオンライン講演

「おーなんアグサポ隊！」
地域おこし協力隊事業を活用した援農プログラムとは

研修1年目は営農指導員、農業普及員の指導のもと農業体験を行い、農業の基礎知識や栽培技術を学びます。邑南町は中山間地域という地形を活かし、島根県立農林大学の研修や講義でぶどう栽培の基礎も学びます。2年目はぶどうコースと野菜・花コースに分かれ専門研修を行います。3年目、ぶどうコースは自営研修、野菜・花コースは就農準備となります。ぶどうコースは研修中からリースハウスでぶどうの定植・育成を行うことで就農2年目から収穫を開始できる制度になっており、ハウスに対する初期投資がサポートされています。また、野菜・花コースは研修用の農地を借り受け自ら栽培研修を行い、就農に向けて就農地の確保や就農に向けた具体的な活動を行います。研修終了後は新規就農、雇用就農、兼業などの選択肢があり、初めの一歩から幅広く農業を学べる環境が整っているという制度です。

パネリスト
大野 達弘 さん

二本松市で新規就農者の研修を受け入れている
大野 達弘 さん

地域に溶け込んでいくことが大事

初めて研修生を受け入れたのは25年ほど前でこれまで27～28人になるそうです。当時は支援制度など何もなく、住み込み3食付きというだけでアルバイト代などは払わない約束です。研修の初めには「知らないことが最大の武器だから、地域の先輩農家へ聞きに行く。帰りには抱えきれないほどのお土産をもらう。そうして地域に溶け込んでいくことが大事」と話す。一年間、大野さんのお宅の研修で暮らし方や農業技術を教え、独立する際には住まいを紹介し、その地域の頼りになる方へ「よろしく頼む」と繋ぐ。ほとんどの研修生が地域に定着しているのでその点では自信を持っているということでした。また、独立した就農者が冬の間収入が少なくなることを心配し、林業でカバーしようと会社を立ち上げてもいます。大野さんの住む地域は中山間地域のため、林業と農業の棲み分けは難しく、それが中山間地域の豊かさであると言います。その中山間地域の豊かさが原発事故、放射能でダメになったが、現在は阿武隈山系の広葉樹林の再生事業が始まったので、立ち上げた会社で再生事業を請け負い、冬の収入を確保。研修生に対して、地域はあなたにこういう支援ができます、あなたは地域のために何ができますか？ということを常に問いかけながらこれからもやっていく。

パネリスト
佐藤 紫苑 さん

伊達市でいちごときゅうりをメインに多品目で野菜を栽培している県北農民連会員
佐藤 紫苑 さん

食卓を自分たちの作った食材で満たす

「自分たちの食卓を自分たちの作った食材で満たすこと」が目標」と語る佐藤さんは、就農から5年が経過し、現実はそんなに甘くないことを話してくれました。新規就農者を受け入れる体制が絶妙に整っておらず、自分は制度を利用していない。同世代で独立経営をしている仲間が少ない。全く知らない土地で農地を探しスタートを切ることはハードルが高い等々、数えきれないほどの困難や苦労を経験している佐藤さんの発言には重みがあります。しかし、佐藤さんは「農業はその土地の風土、地域性に合ったものにしていく必要があるので、ネットの情報ではなく、近所の大先輩に教えを請い、それを試してみる素直でかわいい農家になりたい」と話していました。一人でも多くの方が農業に関心を持ち、それぞれのできる範囲で関わり、未来へつなげていくことが農業の発展につながると考え、日々の農作業に励んでいます。

◆参加者の感想◆

様々な実践、努力をふまえて、経験の交流をおこなえる場として継続的な開催を期待します。

東京から移住して1年。きゅうり栽培をスタートさせ、家族3人で頑張っています。「農」（林業も含めて）の仕事の多様性をもっと多くの人に知ってほしい。

大波さんの話を聞いて、新規就農者側も一定の覚悟が必要なのだと強く感じた。

将来、農薬や化学肥料を使わない自然な農業をやりたいので、とても勉強になった。

遠慮のない意見交換がされていて気持ちがいい。パネリストに対する質問、その答えがきっちりしていて形だけではなく見ごたえのあるものだった。

女性農家の話を聞く機会が少ないので、貴重なお話がありがたかった。

就農支援センターの大波さんの話が力強く、心強いと思った。福島の農業の未来は明るい。

種をまくことは夢をまくこと。食料自給率が低い中、食べ物を作っていれば間違いない。大変勉強になりました。

支援の現状や、支援を受けての問題点や改善してほしいことなどリアルな話が聞けて良かった。不安に思うことや改めて考えさせられることなどあったが、だからこそ就農に向けて頑張りたいという思いが強くなった。

農業経営が軌道に乗るまでしっかり伴走

福島県農業経営・就農支援センターは昨年11月に開催された「新規就農者のつどい」で参加者から出された・住居確保・経営や農業技術の習得・農地や機械のあっせん、これらの相談に行政としてワンストップで応えられる体制を取ってほしいという要望を受け設立された全国初の支援センターです。福島県、JAグループ、農業振興公社、農業会議がワンストップ・ワンフロア体制で相談を受付ます。福島県の令和4年度の新規就農者は過去最高の334名でした。今後の福島県の農業の維持・発展のためには、新規就農者の確保・育成、定着、さらには経営発展まで一貫した伴走支援が必要であると大波さんは分析します。様々な形で就農に向けた研修や就農後のサポート、福島県の農業の発展を目指します。

パネリスト
大波 恒昭 さん

福島県農業経営・就農支援センター事務局長
大波 恒昭 さん

半農半X：総合的な営みが出来る農業は魅力的な仕事

両親の職業が医師で「健康が大事、病気にならない努力をしないといけない」と教えられ育った。環境問題と健康問題について興味を持っていたところに、海外の友人から福岡正信氏の「わら一本の革命」を勧められ、その内容が腑に落ちたことが就農するきっかけとなったと語ります。就農する際、全国の有機栽培や自然栽培をしている農家を30軒ほど見てまわり、自分と考え方が似ている現在の会津美里町の農園に決め、住み込み3食付きの生活をしながら有機栽培で16㌶の米を栽培している。

地域循環を目指し、酒蔵から「酒粕」を、大工から「かんな屑」などを買い取り植物性の堆肥を年間600～700t作っている。早朝と夕方を農作業にあて、昼間は別の仕事をする、いわゆる半農半Xを実践する中で、総合的な営みとしての農業に大変魅力を感じていると話してくれました。宇野さんも新規就農者の制度は使っておらず、助成を受けた後に5年間続けないといけないという縛りが嫌だと感じたそう。「農業はやってみないとわからないので、2年くらい支援して、その後は好きにしていいよという制度になるといい、また売り先と栽培技術を提供して欲しい」。

パネリスト
宇野 宏泰 さん

会津美里町で雇用就農している
宇野 宏泰 さん

農民連フラッシュ flash

農産物検査員育成研修・現場実習（小麦・大麦）

7月28日、小麦、大麦検査員育成研修の現場実習が栃木県で行われました。栽培の注意点や検査の流れをご指導いただき、実際小麦と大麦のサンプルを鑑定し、意見交換を行いました。

生業訴訟の第二陣 第21回期日

8月3日福島地裁において、生業訴訟第２陣の21回期日が行われました。猛暑の中、九州から玄海原発差し止め訴訟弁護団も駆けつけ、何としても最高裁判決を乗り越える判決と世論を勝ちとろうとデモ行進や報告集会が行われました。

福島農民連の電気購入できます！

福島農民連産直農協で発電している電気を「みんな電力」から購入や応援することができます。再生可能エネルギー100％の電気も選択できます。みんなの選択で地球を冷やしましょう。

https://minden.co.jp/personal/

二本松発電所